

# 西伊豆町における 地域創生拠点形成事業の取り組み

上田 信

## はじめに

2014年に日本創成会議が地方自治体を網羅して人口動態を分析し、少子高齢化で消滅する可能性のある自治体名を挙げると、日本に衝撃が走り、政府も地方創成を政策に掲げるようになったことは周知のことである。地域社会の少子高齢化は、日本が育んできた自然と共生する文化を消滅させ、山野や海洋などとヒトのつながりが失われることにつながる。

2016年11月にESD研究所と覚書を交わした西伊豆町は、創成会議の試算に拠れば、総人口が2010年に9,469人であったものが、人口流出が続いた場合には、2040年に4,097人とマイナス67.6%に減少するとされており、静岡県の中なかでは3番目に深刻な事態を迎えることが予測されている。実際に、2017年の町の人口は8,200人程度と2010年よりも千人あまり減少し、ほぼ予測されたペースで減少が進んでおり、静岡県が行った中学生・高校生の意識調査でも、15年後に西伊豆町に住んでいたいという希望を持つ生徒は、半数以下であった。抜本的な取り組みを展開しなければ、地方自治体として維持することが困難になることが予測される。

一方、町ではすでに「まちづくり協議会」が設立され、持続可能な社会を目指した取り組みも進められている。町は街（仁科地区）、里（宇久須地区）、海（田子・安良里地区）、山（大沢里地区）と多様な環境を含んでおり、西伊豆町において自然と共生した持続可能な地域創生拠点が形成されるならば、それは単に日本のみならず、日本以上に急速な少子高齢化に直面することが予測される中国や韓国に対しても、着目されるべきモデルとなることが期待される。

## 今年度の取り組み

西伊豆町側から見た地域創生拠点事業の取り組みの動きについては、町役場まちづくり課職員の長島司氏の報告で尽くされているので、本稿ではESD研究所ならびに上田（同副所長）の動きについて、時系列に従って列挙するにとどめたい。

7月8日 まちづくり講演会。研究代表者の阿部（ESD研究所長）が、ESDに基づく地域創生事業について解説する。町内からの参加者が百名を超え、覚書を交わしたことの意義が、地域住民に周知される契機となった。

9月6日 伊豆市立伊豆高等学校土肥分校において、上田が模擬授業。「西豆の魅力」というテーマで、生徒に魅力と思われることを提起してもらい、それをどのように将来に活かしていくかについてワークショップ形式で議論し、提言してもらう。

9月8日～10日 上田ゼミ合宿。ゼミの受講生8名とともに西伊豆に滞在。西伊豆町の樽漕ぎの会の指導のもと、伝統的な和船の操作を体験する、地元の「まちづくり協議会職部会」の指導のもと、かつて鰹漁の基地として栄えた田子地区に伝わる鰹を用いた郷土料理、縁起物でもある特産の塩鰹を用いた塩鰹うどんなどを作り、味わう。最終日には松崎高等学校の生徒と大学生の座談会を実施。伊豆には大学が立地していないため、生徒には大学生と接する貴重な機会となり、将来の展望を開く契機ともなる。こうした高大連携は、地元へUターンの契機を生み出すことにつながることを確認できたことは大きい。学生には合宿の経験にもとづき、西伊豆町での地域創生についての提言をレポートにまとめさせた。

9月9日 西伊豆町ESD推進委員会(第1回)。西伊豆町の観光協会などのセクターの代表者を集め、ESD事業を進めることが協議された。町長を委員朝とし、上田が副委員長に選出。各セクターにこれまでの活動と今後の企画についてのアンケートを取ることが決まり、年度末に提出されることとなった。

10月18日 静岡県知事戦略局知事戦略課主催「美しい“ふじのくに”まち・ひと・しごと創生県民会議(伊豆半島地域会議)」に、上田が指導し西伊豆夏合宿に参加した学生が参加し、提言を行った。

10月30日 川勝平太静岡県知事との面談。西伊豆町長・まちづくり課職員と上田ならびに上田が指導している学生1名とで、静岡県庁を訪問、知事にESDによる地域創生事業への協力を要請した(参考資料:「ESDによる西伊豆町地域創生に関する提言」知事に手渡しはしなかったが、この文面に沿って上田から説明を行う)。

12月25日 「ESDによる戦略的地域創生」プロジェクト合宿。西伊豆町役場まちづくり課の職員から、近年の取り組みについて報告を受ける。特に、この夏に実施されたサンマ漁船の体験学習について、その成果が強調された。

12月26～27日 上田が西伊豆町ならびに隣接する松崎町を訪問し、打ち合わせを行う。松崎張での地域創生の取り組みについて、町役場企画観光課職員から聞き取りを行うとともに、各ポイントを参観した。

1月19日 西豆地区連携型中高一貫教育連絡協議会主催「平成29年度西豆学合同発表会の御案内」に上田が出席した。外国出身の母親を持つ生徒が、西伊豆町内の外国人から聞き取り調査を行い、外国人にとっての町の魅力、生活しづらい点などをまとめた報告が、きわめて印象的であった。

2月24日～26日 「国際ボランティア学生協会」(IVUSA)の西伊豆での活動に上田が参加した。西伊豆町では現在、さまざまな主体が地域創生に関連する事業に関わっている。その1つが全国の大学生を社会活動に参加させているであり、2014年に西伊豆地区を襲った集中豪雨による水害に対する復興事業から、「クールタウン構想」を掲げて、活動を行っている。この構想の要点は、木炭を軸に二酸化炭素の排出を抑制する物質循環を造り、この循環を支える町内外の人々の連帯を高めるという点にある。具体的には、①西伊豆町内の山林に多く見られる放置間伐材などを簡易な炭焼き器を用いて炭にし、耕地休耕田での健康食材ヤーコンの栽培の土壌改良材として用いる、②劣化が進む松林の林床整理と植樹に炭を用いる、③ヤーコンの試食会から発生した「西伊豆クールタウン・フェス」を開催するなどの事業が、毎回100名ほどの学生が全国から集まり、取り組んでいる。2月24日

にはクールタウン・フェスに参加。町民 205 名ほどが集うイベントとなっていた。また、25 日には黄金崎松林の再生活動に参加した。

## 展望

将来の目標としては、集中講座を開催するところに置きたい。

講師陣は地元有識者・まちづくり協議会関係者に加えて、ESD 研究所関係者の人的ネットワークを活かして広く求め、受講生としては地元の青壮年（特に土肥高校・松崎高校の生徒）、帰省者、IVUSA が呼びかけた全国の大学生など。高校生にとっては、大学生と交流する良い機会となると思われる。

元田子中学校舎で合宿しながら、座学・ワークショップ・フィールドワークなど多様な形態で展開し、集中講座の成果は、エコツーリズム・アグリツーリズム・食育・地元伝統文化再発見などのテーマごとに整理し、地域創成の提言として広く公開する、また、近年増えつつある海外からの観光客を、日本の地域社会と世界とを結ぶ接点とし、西伊豆町での地域創生の取り組みを海外に発信することも考えられよう。

（うえだ・まこと 立教大学文学部教授／同 ESD 研究所副所長）